ま え が き

朝 比 奈 泰 彦

一昨年（昭和 33 年）は東京大学の植物学第一講座（分類学）第 2 代目の教授であつた故早田文蔵博士が昭和 9 年に逝去されてから 25 周年に当るので早田博士の親友である八田吉平氏が早田博士の追憶文を投稿されたのを機会に早田教授に師事した佐竹義輔君や早田博士在職期最後の学生であつた木村陽二郎君の感想を執筆して頂き更に早田博士の印度支那，タイ国採集旅行の足どりを津山尚君が記述した文章を挿入して本号の主体を構成した。早田博士逝つて四半世紀の今日に以上の記録が我国植物分類学の推移を考察する一資料となることを期待する。

八 田 吉 平*：盟友理学博士早田文蔵君追憶

Yoshihei HATTA*: Memory of my friend, Dr. Bunzo HAYATA

早田文蔵博士は私の生涯中の莫逆の親友であり又畏友である。その印象は深く思い出は綿々としてつくる処がない。一昨年の秋，博士の愛嬢秋山博士夫人幸子さんから，郷土加茂図書館より展示会に，記録その他を要請されたについて私に書く様依頼されたが当時は簡単な記事を作つたにすぎなかつた。所が昨秋また幸子さんから 33 年 1 月 13 日は故人の 25 回忌に当る故，今度は委しく書くよう依頼を受けたので，博士の略歴等の資料を得，旧稿に更に記憶を喚起し，思い出を追加し，全面的に書き改めたのが本稿である。本稿は博士と私との多年の交遊を主とした追憶である。博士の青壮年時代の面影を偲ぶ一端ともなれば，幸慶とする処である。

1. 一高生時代　私が早田文蔵君と相識るに至つたのは今から丁度 62 年前の明治 30 年 8 月私達が共に旧第一高等学校に入学した時に溯る。君は郷里新潟県の長岡中学校の 3 年生で一時退学，後志をたてて上京，郁文館中学校を経て一高に入学された。君は明治 7 年 12 月生で私より 4 年の年長者でクラス中の年輩者の一人であつた。当時理科と農科とは志願者も比較的少なかつたので 2, 3 の工科生を交えて 1 クラス (40 人) を構成していたのでわれわれは 3 年間同クラスで終始した。同級生には後の東北大学教授故愛知敬一博士，故後藤平一（愛知君と双璧の俊秀であつたが成業をみず早逝），農林省耕地課の重鎮片岡謙，気象学者平田徳太郎博士，航空機学者岩本周平及び当時のスポーツ界の呼び物だつた端艇競走の選手の主将大場信続の諸君があつた。前 2 人の他は今も健在である。

---

* 仙台市[redacted] Sendai City.

小石川植物園の温室における，ありし日の先生

さて会津の田舎からポットでて交際下手な私もいつしか早田君とは親密の間柄となつた。早田君は在郷時代から植物の研究には頗る熱心で既に相当の造詣があり，一高入学後日曜や休祭日などには必ず単独で胴乱を下げて郊外を散歩することを常としていたのでスパチール（ドイツ語の散歩の意）早田の愛称を得ていた。その七ツ道具の一としてルーペとナイフを麻紐で結え上着のボタン孔を通して左胸の上ポケットにねじこんでいたのが今でも印象的だ。夏休は2ケ月以上に亘るので君にはとつておきの研究期間で一日も空費することがなかつたようだ。

私が最も記憶に銘し印象深いのは明治31年7月の夏休みに早田君が日光から山越して南会津に入り桧枝岐村から尾瀬沼の湿原地帯の植物を調査研究して約束の如く私の郷里（福島県河沼郡河東村大字八田）八田野部落を訪問せられた時の事である。当時会津には汽車も通じていなかつた時代で，草鞋脚胖ばきは無論であるが，驚いたことは普通の採集胴乱の外に大きな風呂敷包みを背負つており，その中は実験室用の大きな顕微鏡と解剖用具や旅行用品一

切が入つていたから優に6キロ以上はあつたろうと思われた。

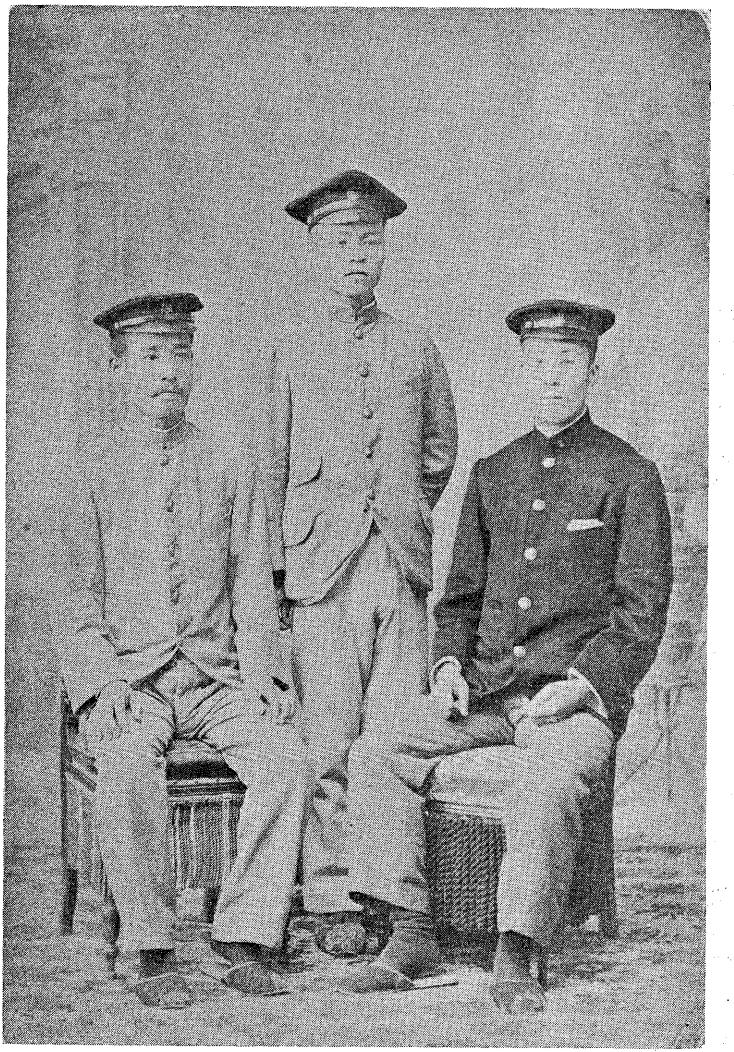
それからわれわれは相携えて噴火の余煙がまだ立ち上つている磐梯，吾妻両山とその高原地帯を踏破した。当時両山とも噴火後10年を経過した許りなので桧原湖はじめ幾多の湖沼の周辺は熔岩やその他の石塊が押寄せたままで草生も少なく，湖中には立木がそのまま残り湖形もまだきまらない状態であつた。

この旅行中思い出すことは磐梯高原をすぎ中吾妻山の密林中の頂上に近い処で一天俄かにかき曇り電光一閃一大雷鳴と共に驟雨忽然として降り来り，旅馴れぬ私は大に狼狽したが君は毫も慌てず沈着に水の流れる溪谷に沿つて下れば里に出るから心配はないと私を導いてくれたことで，さすがに森林の調査旅行に馴れたものだと感心した。

それは旅行中の1コマに過ぎないが最も敬服したことは君は1日の行程を了つて旅館に入るや休息する暇も惜しそうに例の風呂敷包から顕微鏡と解剖用具をとり出し旅館の机や卓子は忽ち実験台に早代りし，その日の採集植物を整理記録し珍らしいものは一々丁寧に写生し必要に応じ鏡検をし，その日の採集植物の研究を了らないうちは決してくつろがないという徹底した真剣な調査研究振りで，全く頭が下つた。後日大成されたのも故あるかなと思う。思うにこの様な大きな顕微鏡を背負ひこんで到るところの旅館を即席実験室として，研究をつづけるような真剣な学者は前後を通じて類をみないのではなかろうか。君は私と同行の磐梯吾妻の旅行をおえた後郷里新潟県加茂町に帰省の途路単独で飯豊山連峯を踏破してその様子を，委しく私に報ぜられた事を記憶する。

この旅行中，君が私に信頼を倍するに至つた一事があつた。私は旅行前に夏季帰省中の出身中学同窓会員の懇親会に出席する事を約束していた。その期日は旅行の後半に入る頃であつたので前半の磐梯山方面の旅行も了わり後半の吾妻山行を割愛せざるを得なくなり，尽きぬ思を残して，猪苗代町で一旦君と袂を別ち帰省についたがかえる道すがら君一人で旅行させるに忍びず3キロ4キロ進んだ頃断然引返し君と行動を共にする事を決心し，会の幹事には事故欠席を電報し，夕暮迫る道をあてもなく急いで君の後を追つた。夏の長い日あしも既に暮れて夜色も漸く深くなろうとする際道の岐路に達したのでそこにある一茶屋に「吾妻山行は左右どちらか」と尋ねたところ，この茶店は旅館兼業であつて，私の声をききつけて，「やあ八田かここだここだ」と君が喜びむかえて互に奇遇に感激した。かくて後半の旅行も共にする事を得たのである。この一事は君に大なる感動をあたえ，後日君は令弟良助君に，「会津で友誼に厚い親友を得た」と喜び合つた由である。これが互に膠漆の盟友たらしめた主因であつたように思う。

このような次第でこの旅行後君と私との交遊は，全く兄弟の間柄となり莫逆の親友として一生変る所がなかつた。そして日曜毎の散歩も遠足も時に同伴した。一度は陽春4月の朝4時から共に寄宿寮を出て小金井観梅に出かけた。荒川堤や小金井国分寺附近を散歩し夜8時すぎにヘトヘトになつて帰寮した事は今でも記憶する。当日は恐らく約70キロを跋渉した計算で，一日の行程として私の生涯中の最長の強歩旅行の記録であつた。



右. 早田文蔵先生, 中央. 八田吉平氏, 左. 片岡謙氏 1903 年撮す

2. **理科大学と大学院学生時代** 大学に入つた後も君はその調子で休暇を利用し内地の各地にその足を伸ばしその一夏季休暇には, 遠地の非常に困難な場所に採集旅行し新学年に1カ月も後れて帰学した事があつた。理科大学卒業後君は直に大学院に入り, 研究に専念されたが君の家庭の関係上学資の一部を自弁しなくてはならぬので, 附属植物園で植物標本の腊葉の調製などのアルバイトで学資を補足して節約に節約を重ねて, 研究さ

れた苦心に就ては，当時病気療養中の私を激励された手紙に詳細に記されてあり，私は君の志操強固なる厚き友情にひたすら感銘した。その書面は他の記念資料と共に永く筐底に保存しておいたが，不幸先年の仙台空襲の際焼失，烏有に帰した事は甚だ遺憾である。その後君は台湾植物の研究に取り組み，時の台湾総督府民政長官後藤新平氏の知遇を得て，研究に事欠かなくなり，台湾植物の研究を大成された事は，周知の事実である。私自身卒業後一旦就職したがはげしい神経衰弱に羅り，2ケ年郷里に静養の結果やつと回復して，39年4月職を母校農科大学農場に奉ずる事になり，上京した際君は小石川指ケ谷町の下宿に温かく私をむかえてくれた事は大なる感銘であつた。その年の8月君は富士植物帯研究のため富士の南麓に滞在中であつたが，君の誘引に応じ私は君と共に大宮口から初めて富士に登山し型の如く頂上のお鉢廻りをし頂上の屋舎に寒い一夜を明し，翌朝早く御来光を拝し下山の途につき，君は大宮口に私は吉田口から甲州河口湖方面に分れたのが君と共にした最後の旅行で，永く忘れる事は出来ない，翌40年7月私は韓国統監府の嘱託技師として，韓国間島の農業調査に従事する事になつて，渡鮮したが君に涵養された植物の採集に心掛け，調査の傍ら採集した植物標本を君の紹介により，中井猛之進博士に送り，同地帯の植物分布調査の資料に供する事を得た事は，全く君の啓発によつたものである。私は間島問題解決後も引続き朝鮮内に就職していたので，帰京の都度君を訪ねて談ずる事を大きな楽しみとしていた。

3. **東大教授時代**　(本項は主として北大教授山田理学博士の昭和9年7月植物学雑誌同君小伝の記事に拠る)

君の研究は益々軌道に乗り，業績もあがり，明治40年11月には台湾菊花植物その他の論文を提出して理学博士の学位を授与された。41年8月には東京帝国大学理科大学講師に任ぜられ。42年12月私費を以つて英国に航し植物学の研究に従事し，次で仏，独，露，を巡つて帰朝。大正3年ベルギーブラッセルに開催された万国植物学会議に列席のため再度渡欧した。大正6年5月と10年5月の再度に亘り台湾総督の命により，旧仏領印度支那及びシャムの各地の植物の採集ならびに視察旅行を遂行した。大正8年9月東京帝国大学助教授に進み，9年5月台湾植物研究の功により帝国学士院より桂賞を授与された。同じく11年5月同学教授に任ぜられ，同13年4月理学部附属植物園長に補せられた。また15年11月東京にて開催の太平洋学術会議役員として活やくした。君の研究論文及び業績は海外の専門学者の間に次第に高く評価され，昭和5年ケンブリッジに開催された万国植物学会にはそのヴァイス・プレジデントに推せんされたが，偶々心臓病のため一時危篤に陥つた。幸に危機を脱したが列席を断念し専ら療養小康を得て，教壇に立つ傍ら植物分類学の大著述に専念し，昭和8年6月その第1巻裸子植物篇を完成出版し，第2巻被子植物篇著作中，昭和9年1月13日宿痾心臓病の為め，巨星遂に地に墜ち，59年余りの生涯を閉ぢた。(君の没後本田，佐竹両博士の尽力により，第2篇巻子植物総論を完成出版，昭和10年1月) 君若し天寿を全うし得たならば，君の素志たる，第3巻羊齒植物篇，第4巻蘚台植物篇，第5巻藻菌及び下等植物篇の各を相

ついで完成し，斯学界に不朽の大著を寄与された事を信じ，君が中道にして他界された事は，真に痛惜に堪えない。特に私が遺憾に思う事は，君の晩年病漸く重く，研究と学生の指導意の如くならざるを奠じ，停年退職の後は療養の旁ら専心研究と著述に没頭する事を唯一の楽しみとすると漏していた事を追憶し，一層哀惜の念を禁じ得ない。

4. 君の家庭 君は新潟県加茂市（当時町）の早田新吉氏次男として，明治7年12月2日誕生，6才の時父君を亡われ母君ハツさんと，祖父母上に養われたがその二人も，明治23年と24年に相次いで他界された。君は30年7月第一高等学校に入学，母堂はその前年46才で病没された，君は2人の兄弟あり。令兄佐四郎氏は君より2年の年長者で石油関係会社に勤務されていた。友愛の情こまやかな頗る温厚な紳士であつたが昭和17年71才で逝去された。

令弟良助君は君より4才下で，上海同文書院在学中明治33年夏病に罹り危篤に陥つた。悲報に接し君は急いで渡航されたが，遂に間に合はず，君が遺骨を抱き悲痛の面持を以て帰京された事を記憶する。

君は理学博士の学位を授与された明治40年の12月に，恩師松村博士の媒酌で藤沢市の雨谷与左衛門氏の次女くに嬢と結婚され一男三女を得たが，夫人は君に後れる事10年，戦時中諸事困難なる時代に昭和19年4月不幸病死された。長男文一君は頗る俊秀で君が最も望みをかけた愛息であつた。一高を経て東大理学部数学科を卒業し，中学校の教師の傍ら原子物理学の西川正治博士に就いて勉学中，病を得て昭和20年2月，36才で病死された。長女幸子さんは北大の秋山茂雄博士に嫁し，1男3女あり，次女亀代子さんは不幸にして3才で夭死され，三女亀佐子さんは弘前大学の照井陸奥生博士に嫁し，2児あり多幸なる家庭を営んでいる。

結言 君は資性濶達しかも沈着豪も辺幅を飾らず，飽くまで真剣で責任感極めて旺盛，常に無駄を排し質実剛健所信貫徹のためには万難を排して邁進する果敢な精神の持主であつた。この点ややもすれば誤解を受ける事があつたのではなかろうか。しかし内心は頗る敦厚で涙もろく優にやさしい思い遣りがあつて，親しみやすい美点を有していた。君が多年心血をそそいだ研究の結晶とも言うべき，植物分類学に対する君の新学説は一部学者の反対論あるに対し，君が病中に拘わらず，筆端火を吐く熱情を以つて檄文を発表された事もあつた。その文は植物分類学第2巻の冒頭に詳細発表されている。

あとがき

本稿の筆者，八田吉平氏は，福島県に明治11年12月4日に生れ，第一高等学校をへて東京帝大農科大学農学科卒業，農科大学嘱託の後，明治40年渡鮮し，韓国統監府間島派出所技師として奉職，朝鮮総督府技師から水原高等農林学校教授となり，昭和9年12月退官後は朝鮮忠会理事，東洋水産組合長の職にあつたが，昭和19年5月退職して帰還し，一時は郷里福島県八田で村長をつとめられたが，現在は仙台市におられる。